

玄での山をくりやきつる郭公玉まつる夜の空に鳴なり

〔傍廂前篇〕郭公

大永の頃、宗祇弟子宗長といふ人書ける書に、八月中旬の頃まで、子規晝夜となく鳴きければ齋非時にもたへかねて、

聞くとびに胸わろければ郭公返吐とぎすとぞいふべかりける

又山崎宗鑑が

かしがましこの里過ぎよ郭公都のうつけさぞやまつらん

貞丈曰く、郭公の聲は愁はしく物淋しき音なり、されば好みて聞くべき物にあらず、鶯の聲とはいたく異なり、唐詩などには、此聲を聞きて愁情を生じ、故郷を思ひいだし、哀しめる意を作れり、實にさこそあるべき事なれば、歌には時鳥を待ちかね、野山に出で、尋ねありき、又初音をば命にかへてもきかまほしき意をよみ、人より先きに聞く事をほまれとし、實に風雅の事にあらず、俗情なる人といどもあらそひて、其音を人より先に聞きて、愁はしくも悲しくも聞きなさるは、其音に感ずる心もなく、いどもあらそふうかれ心のさわがしきなり、宗鑑が都のうつけさぞや待つらんといへるは、子規の音聲をよく聞きまるとやいはんといはれたり、彦麿云く、師翁の説實にさる事なり、されど愁はしくもゆかしくもおもしろくもかなしくも、聞きなす人の心の喜怒哀樂に隨ひて、いかにも聞きなさる、物なれば、あながちに愁はしきのみにもあらず、曙の空のけしきたゝならぬに、一聲鳴きて過ぎ行くゆふぐれの村雨のはれ間に、名のり出でたるなど、むげに愁はしく、いまはしくは聞きなされず、されど近きほとりの木にやどりて、鳴きかはすはかしましく、逆上するのみにて、愁はしくはなし、一とせ芝切通しに住ひしけるころ、あまたの時鳥、金地院山内の樹木に宿りて、終日をりはへてたれかまさると鳴きたつるに、困じはて